
能力使い

サイキアスカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

能力使い

【NZコード】

N4187A

【作者名】

サイキアスカ

【あらすじ】

帝や沙良は不思議な力が使えた。人間には無い、不思議な力。そして、能力者たちによる、不思議な戦いが始まろうとしている。

第一章・知らせ（前書き）

不思議な力・不思議な人・戦い。

第一章・知らせ

「・・・また？アンタ、馬鹿じゃないの？」

黄金の腰下まである、長い綺麗な髪。綺麗な顔立ち、小さい背。黄金の眼。

彼女 二瀬沙良は、無表情で言つ。

「黙れ。大体、オマエにだけは言われたかねえ」

「それもそうね」

沙良と話している少年 東川帝は、沙良にも負けない無表情で話す。

茶色い髪に、やはり小さい背。

帝の手の中には、銃が握られている。

黒く、赤い水滴が付いている。

だが、弾は入っていない。必要ないのだ。

二人は能力^{チカラ}が使えた。

帝・炎。沙良・雷。

そのため二人は、人とはかわらない。絶対に。

あるとしたら、プリントなどの学校生活でのことだけだ。

帝は、能力を固め、弾代わりに入れ、弾丸代わりに使つている。

一方、沙良は帝みたく武器は使わず、直接使つている。

相手を定めたら、眼に力を入れる。そして、その眼の先にある物を壊す。

二人は部活も習い事などもしない。

家にずっとこもっている。

しかし、やはり・・・暇になる。

そのため、人殺しを始めた。

当初はすぐやめよつと思つていた。しかし、一回やるにつれ、ハマつていつた。

そして、満月の夜、ある公園に来たところを殺る。

しかも思つたよりも、犯人が捕まらないらしく、警察は苦難してい

る。

そのコースをみて、帝たちはスリルを味わつ。
もつ、それは日課であつた。

「ねえ、帝。今日、どうあるの？」

「は？ どうするって……今日、満月じゃねーじゃん」

「だからよ。馬鹿」

沙良はやつぱりと、わざと家に帰ってしまった。

なんなんだ？

帝はそう思ひながら、やはりわざと帰つてしまつた。

その帰り道、帝はあることに気がついた。

そして、帝は自分の腕時計の日にちを見る。

「……明日……3月4日……アイツの……誕生日だっけ」

帝はそう思つた。そうだ。思い出した。アイツ、明日誕生日だつた。

沙良とは、同じ高級マンションの住民だつた。しかも隣同士。

「……」

帝は無言で、町へ向かつた。

「？」

沙良は自分のポストに入つてゐる手紙を見つけた。
中を開けてみる。

「……つーつー？」

沙良は言葉を失つた。

「帝……つーつー？」

沙良は慌てて、帝の名前を呼んだ。

能力使いの、沙良さんへ。

しつています？

戦いのこと。

もう始まつている」と。

こうか書かれていた。

第一章・知らせ（後書き）

知らせは何のためにあるのだろう。

戦いの始まり（前書き）

あらすじ

沙良の下に、知らせが来た。
戦いの始まりの知らせが。一方、帝は町に向かっていた。

戦いの始まり

帝は町にいた。

そして、悩んでいた。

「アイツの趣味・・よくわからねえ」

だが、しばらく考えて思いついた。

過去に、沙良の好きなものを聞いた覚えがあった。

そのときは

アクセサリー・・。

と言っていた。

「やっぱ、女なんだな・・」

帝はそう言った。今ここに沙良がいたらぶつ飛ばれそうだったが。
そして、近くの店に入つて行つた。

ガ　　と自動ドアが開く。「いらっしゃいませ」と明るい声が店内
に響く。

「あ～・・

帝は、店内を一度見渡した。
端から端まで所狭しと、物が並んでいる。

「ん」

帝の目に何かが映つた。
近づいて確かめてみる。

「・・・」

それは、綺麗な曲線を描いた雫の形で、透き通つた青色のネックレ
スであった。

「へえ・・すげえーじゃん」

「お客様。こちから最後の一品となつております。どうしますか?」
店員がいつの間にか来て、問いかける。

「あ～・・」

帝は値段を見た。お手「じゅ」とはいえないが、高いともいえない。

まあ、普通だろ。

一
じ
き
・
・
・

「ありがとうございます。代金は五千円です」

帝は、かばんから財布を取り出した。

そして中から、五千円を取り出す。それを庄

店員はそれを受け取った。店員はラッピングをどうするかなどと聞

いてきた。

一応、プレゼント用にしてもらつた。

帝は外に出た。

その瞬間。

ପାତ୍ରବିନ୍ଦୁ

何か凄まじい速さのものが、目の前をよぎった。

• • • C C ! ?

帝はすばやく、身構えをする。

ガゴツ、と何かが後ろで倒れた。

それは看板が真つ一つになつていて、その一つが落下した。
そして、その近くに青々とした葉が落ちていった。

「葉・・？」

帝はその葉を取る。

卷之三

そしてすぐに・・・・・逃げた。

いや、逃げたわけでは無い。人のいないところに行つた。

その後Nでなにせら
黒し影か重してした

はあはあはあはあはあはあはあ。

息が苦しくなつてきた。

何でここは、こんなに店の列が長いんだ！？

帝はやつをかから、一キロは走つてこる。
なのに、まだ続く。

「あれ？」

帝の足が止まつた。
「い」せわつあも通つたよつな・・。

「やつとか」

どこからか声がした。

その正体は、緑色の髪をした少年であった。
手には刀を持つている。

「なんだ！？ オマエは」

「ん？ しらないのかい？ だつたら教えてやるよ」

少年は帝の前に下りてきた。

「戦いが始まるつてことを。こまから初戦が始まつて事を」

帝は軽く身震いをした。

そして、その場所で戦いが起つた。

戦いの始まり（後書き）

緑の髪少年は一体何者！？これからもヨロシク！

縁の髪少年（前書き）

たたたたたたつ！沙良は帝のもとへ走って行く。

少年が目の前に降りてきた。

少年は、につ、と笑つてから、眼を細めた。

ԵՐԵՎԱՆԻ ՀԱՅՈՒԹՅՈՒՆ

けた。

その瞬間、帝の手には銃が現れた。

しかし、あつちもあつちでまだまだ飛ばしていく。

だが、少年が動いた。

思つたよりも少無い動きは卑く、しかも正確であった。

卷之三

葉の一枚が、帝の頬に小さい傷をつけた。ほんの小さい傷だったが、かなり痛む。

帝は弾を放つた。

それは児事に、緑の髪の少年に命中した。

少年は、舌打ちをした。

「・・・おい、オマエは誰だ！」

帝は少年にそんざいした

少年は、にいつ、と笑つた。そして言つた。

「ボクは、草木明啓。草・木の能力者さ」

「明啓？」

「そりや、まあ 続きをやろうじゃないか」

そう言つと、明啓はまた、葉を飛ばしてきた。

ババババババババババババババッ！！

帝は弾を恐るべきスピードでしかも連續で出した。

明啓は数え切れないほどの、葉を飛ばしてきた。

帝は先行を取らない限り、明啓には手が出せない状態でいたが、後ろから ニゴニゴニゴニゴニッ と大きな音がした。

「え・・？」

後ろには、大きな大木が帝に向かつて落下しようとしていた。

そして、今、明啓が操るのをやめた。

そのとたん、今まで操られていた大木は、紐が切れたように一揆に落下した。

「わあああああああああああああつ！！！」

帝は叫んだ。その刹那。

ババババババババババババババババッ！！

大木が一瞬のうちに粉々になつた。

「沙良！」

「帝！-！」

沙良は帝の元まで走つてきた。

「沙良！-？どうしてここに！-？」

「帝こそ！なんでここに？探したんだから」

沙良は、安堵のため息を漏らすと、明啓に向かつて言った。

「草木明啓 草・木の能力者ね」

「へええつ・・知つてゐるんだ」

「当たり前よ」

「そつちの子は、知らなかつたみたいだけど」

沙良は「そつちの子」というのが、帝だと知つて帝を少し睨む。さすがにこれには言い返せません。はい、すみません。

帝は心の中で沙良にあやまる。

「また中断しちゃったね。ということで、またまた始めようか」

明啓は少し困りながらも言つた。

二人は身構えをする。

今度は、葉ではなく大木の波であった。

これこそ自然破壊だ。

帝はそう思いながらも、大木を壊していく。

沙良も一揆に何本と、力を發揮していく。

しかし、明啓は攻撃を止めない。

そして、明啓はまた、速攻攻撃に出た。

今度は、さつきより速い。

ついでに、大木の波というおまけ付で。

明啓は帝の真後ろにすばやく回る。

それを、沙良が電撃で攻撃する。

明啓はそれを軽く交わす。

電撃が後ろの電柱に当たり、電柱が折れる。

「・・・やりすぎじゃねーか？」

「・・・そうでもないわ。戦いが終われば、すべてが元に戻る・
はずよ」

「はず?なんか危険」

二人は会話を終わらせ、また明啓のほうを見る。

明啓は一人の一瞬をついて、また走り出した。

不意を突かれた二人は、数メートル弾き飛ばされた。

「わあっ！」

「きやつ！」

どんづ、と壁にぶつかり、二人はへたりこんだ。

明啓はにつ、と笑つて二人に大木の波を放つた。

よけられない！？

帝はそう思った。だが、

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガアアンンツツツ

突然凄まじい音が、空からした。

[۲۱]

帝に目を見る。すると
帝がえんにかうに顎こいてて
口と光つてゐる。

十九

「ヤ・・・少殿？」

「なに?」

沙良はいつもと変わらない様子で、返事をする。

これは

和妻あたしの抱き

〔 二 〕

Г

おれダメじやん

こんな力もつてねえ
・・・

一体、どうなつてんだ?

明啓は、「なんだ?」という風に驚いている。

しゃあ行くよ……旦拘えておいたほんかしいよ」「

「稻妻・落ちろ」

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンンツツ

やはり、凄まじい音がし、稻妻が明啓の上に落ちた。

明啓は叫び、ゆっくり倒れていった。

「勝負・アリね」

沙良はゆっくり立ち上がる。

そのとき、沙良の手に何かがはまっていることに気がついた。

指輪

帝は誰からのお誕生日プレゼントか？と思つた。
じゃあ、おれあげる必要ないか。

突然、沙良が言った。

「手紙？たれからん？」

・・・・・はい?

「たがひ」
力ササギ

ぜつたい、嘘だろ。

つーか、信じるなよ！

帝は、心の中でツッコミを入れてみた。

「アーティスト」——「アーティスティック」

帝は沙良から、手紙を受け取った。

「カミナリ」と書いてある。たまに「カミナリ」の字が、本居宣長の筆跡で書かれていたりする。

まあいいや。とにかく開けてみよっ。

帝は手紙を開けた。中には、手紙と指輪が入っていた。

能力使いの帝君へ。

知つてます？戦いのこと。
もう始まつてること。

ちなみに、同封したのは、「ストーン」といつ、まあ・
力を上げるものです。
ぜひ使ってください。

カミサマよつ。

なるほど、簡単だけど説明ありがとう。
そして、またなるほど。

沙良のわつきの技は、これでか。

「う・・・・ボクを忘れないでくれ・・・

どこからか、うめき声がした。

『あつ』

一人の声はハモって、明啓のほうを見た。

『じめん忘れてた』

また、ハモった。

やつぱし、沙良がいたほうが、いいかもな。

便利だし。

翌日。

「・・・ありがと」

「どういたしまして」

帝は、無事、沙良にプレゼントが渡せたとれ。

縁の髪少年（後書き）

こんばんちわ。多分、初コメントです。これからもよろしくお願ひしますーなにぶん、卒業式が近く、時間がないんです。（練習で）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4187a/>

能力使い

2010年10月28日07時37分発行